

北風にたこは上がる

小川未明

青空文庫

隣家の秀夫くんのお父さんは、お役所の休みに、外へ出て子供たちといっしょにたこを上げて、愉快そうだったのです。

「おじさんのたこ、一番だこになれる？」と、北風に吹かれながら、あくまで青く晴れわたった空を見上げて、賢二がいました。

「なれるさ。」と、おじさんは、いったが、そばから秀夫くんが、

「お父さん、もつと糸を買ってこなければ、だめですよ。」と、いっていました。そのうちに、たこはぐるぐるとまわりはじめました。

「あ、落ちる！」と、秀夫くんは、あわててお父さんの手から糸を受け取ると、うまく調子をつけましたので、たこは、やっと落ちなかつたのです。

「おじさんは、まだ下手だなあ。」と、賢二がいますと、

「あ、はははは。」と、おじさんは、笑いました。

「賢ちゃん、君の家では、活動写真をしているの？」と、おじさんは、ききました。

「活動写真？ どうしてですか。」と、賢二は、不思議そうに、おじさんの顔を見ました。

「だって、さつきから、ガリ、ガリ、ガリやっているじゃないか。」

おじさんは、それがなんの音であるか見当がつかないので、賢二くんの兄さんか、姉さんか子供の活動写真でもやっているかと思つたのでした。

「あ、あれか。」と、賢二は思いましたが、

「なんでもないんですよ。」と、賢二は答えました。

「そうか、ちようど、活動写真をまわしているようにきこえるから。」と、おじさんは、いいました。

かつて、秀夫くんの家にも、活動写真機があつて、みんながいつて、よく見たのですが、あまりひどくハンドルをまわしすぎて、ついにはいまでは、その機械は、役にたたなくなつてしまつたのです。おじさんは、たぶん、自分の家にあつた、その機械のことを思い出したのでしよう。

「お姉さんが、なにかお料理を造っているのです。」と、賢二は、答えました。

このごろ、てんぴを新しく買ったので、お姉さんは、しきりにいろいろのお料理を造るのだけれど、あまりうまくいかなかったのです。そんなことを思うと賢二は、ちよつと苦笑せずにはいられませんでした。

「昨日のように、卵を焦がしてしまつては、食べられやしないよ。」と、賢二が、いいますと、お姉さんは、女中をしっかりとつけて、

「きよは、力がないのね。もつとかきまわさなければ、だめなのよ。私に、おかしなさいと、あわだて器をひつたくつて、お姉さんは、ガリ、ガリ、ガリと、すさまじい音をたて、卵をさらの中でかまわしはじめました。

「お隣のおじさんが、活動写真をやっているのかときいたよ。僕、きまりがわるかつた。」と、賢二が、いいますと、さすがに、お姉さんもおかしくなつてきて、ついに笑ひ出してしまいました。

そこへ、お母さんが、出ていらして、

「なにを、そんなに、大騒ぎをしているんですか？」とおっしゃいました。

「三時のおやつに、カステラをこしらえるつもりなのが、できないのよ。」と、お姉さんは、顔を赤くしました。

「いつも、そう、卵ばかりむだにしては、困りますね。」

こう、お母さんが、おっしゃられると、お姉さんは、

「学校で、ならつたとおりによつたのよ。どうして、家ですると、うまく卵がふくらま

ないんでしよう。」と、さも不思議そうにいいました。

賢二は、そこにあつた、卵のからを数えて、

「お母さん、六つ卵をむだにしましたよ。もつたいないですね。毎日、ねずみのご馳走ばかりお姉さんは造っているのだ。僕に、それだけのお金をくれれば、大だこが、買えるのだからなあ。」といいました。

これを、おききなさつたお母さんは、

「おまえも、このあいだから、いくつたこをこわしましたか？」といつて、賢二くんをおにらみになりました。

このとき、お姉さんは、

「きよは、なんにも知らないのね。」といいましたので、お母さんは、

「それは、あたりまえですよ。あなたは、学校へいって、ならつてきたお料理さえ満足にできないではありませんか。」といつて、おしかりになりました。お姉さんは、だまつてしまいました。

二、三日前には、賢二くんが、自分のたこを買うのに自分でいかず、女中のきよを使いによつたばかりに、具合のいいたこが手に入らなくて、上げると、すぐにぐるぐる

とまわつて、木の枝きえだにかけてしまつたのでした。そのとき、彼かれは、家うちへ歸かえつて、

「あんな、わるいたこを買かつてくる、ばかがあるものか。」と、きよに小言こごとをいつたのでした。すると、きよう、お姉ねえさんが、しかられたように、お母かあさんから、

「なんで、きよが、たこの善悪よしあしなんか知るものですか。自分じぶんで買かいにいくべきものを、横おうちやく着くをするから、そんなことになつたのです。もう、あんたには、たこを買かつてあげ

ません。」といつて、しかられました。それで、今日きょうまで、たこを持もたずにいるので、外そとへ出でても、ただ秀夫ひでおくんらの上あげているたこを、ぼんやりとながめていたのです。

姉きょうだい弟いは、自分じぶんたちのおへやへ入はいると、まず、お姉ねえさんが、

「お母かあさんは、きよの味方みかたばかりしていらつしやるんだわ。」と、不平ふへいをいいました。

賢けんじ二には、心こころの中なかで、お母かあさんのおつしやることは、正ただしいと思おもつたけれど、

「きよは、とんまなんだよ。」といつて、具合ぐあいの悪わるいたこを買かつてきたので、腹立はらだたしそ
うにこういいました。

「そうよ、ものはこわすし、あまり、りこうではないわ。」と、二人ふたりは、いつしよになつて、きよの悪わる口くちをいっていました。

* * * * *

ある日のことでした。賢二が、ふとお勝手から外を見ると、物置の蔭のところで、きよがあちらを向いて、手紙を読みながら、ときどき目をふいていました。

「泣いているのだな。また、田舎の親から、お金を送れと、いつてきたのかしらん。」と、賢二は、思うと、かわいそうになりました。

きよの田舎は、遠い、東北のさびしい村でありました。家が貧乏なのに、不作がつづいて、ますます一家は、苦しい生活を送っているのです。きよは、毎月もらうお給金のうちから、幾何かを送って、親を助けているのですが、それでも足りないとみえて、よく無理と思われるような手紙をよこすのです。

「おまえも、かわいそうだね。」と、お母さんは、きよに同情していらつしやつたのでした。賢二は、また、そんなことであろう、ここで自分が見ては悪いと思つたので、気づかれないようにして、奥へ入つてしまいました。

それから、しばらく、きよは、そこに立つて考え込んでいるようすでしたが、そのうち内へ入つて、お母さんのところへきて、手紙をお見せしようと思いました。お母さんは、きよのようすをごろんになると、すぐに、

「なにかまた、心配になることをいつてきたの？」と、やさしく、お問いなさいました。

「はい、お父さんが、病氣だそうです……。」

「お父さんが、病氣？」と、お母さんは、びつくりして、その手紙を受け取ってごらんになりました。それには、一週間ばかり、お暇をいただいで、帰ってきてくれるようにと書いてありました。

「これは、弟さんが、書いたのかい。」と、お母さんは、子供らしい文字の手紙を見ながら、おつしやいました。

「はい。」と、きよは、答えました。

きよにも、弟があつて、小学校へいつているそうです。かたわらでこれを聞いていた賢二は、父親が病氣では、どんなにさびしかろうと、田舎に姉の帰るのを待つている少年の身の上に同情せずにはいられません。そして、その手紙の文字は、うまいほうではなかったが、いかにも丁寧に謹んで書いてあつたので、きよの弟さんは、まじめな少年であろうと思つたのでした。自分のよめしまった雑誌でも、きよが帰るときに、弟さんへ持つていつてもらおうかな、などと考えていました。

きよは、その日の夜行で立つことになりました。常なら、はじめて田舎へ帰るので楽しくらうものを、打ち沈んでいる顔つきを見ると、かわいそうでなりません。お姉さ

んと、賢二は、停車場まで、見送っていききました。

「お父さんが、たいしたことがなかったら、早く帰っておいで。」と、お姉さんは、きよをなぐさめていらつしやいました。賢二は、また、心の中で、きよに、わがまをいって悪かったと後悔していました。きよは、そんなことをなんとも思っていないようすで、汽車が動き出すと、さも名残惜しそうに、幾度となく頭を下げて、遠ざかってゆきました。翌朝のこと、お姉さんは、いつもより早く起きて、お母さんのおてつだいをいたしました。

「なかなか感心だ。」と行って、お父さんは、おほめになりました。

「これが、幾日もつづけば、ほんとうに、えろうございますが。」と、お母さんは、笑っておつしやいました。しかし、お膳を出すときに、はや、お姉さんは、茶わんを一つ割りしました。

「大事な茶わんを割りましたね。」と、お母さんが、おつしやると、

「冷たくて、手がすべったのですもの、しかたがないわ。」と、お姉さんは、かえって、ぷりぷりしていました。

「そそっかしいからですよ。」

「学校がっこうのことが、気きになるんですもの。」

「もし、きよが、こわしたら、なんといいいますか？」

こう、お母かあさんがおつしやると、お姉ねえさんも、自分じぶんがして、はじめてわかったので、ちよつとしたことできよをしかつたことを、ほんとにわかつたと思おもいました。外そとには、北き風かぜが吹ふいています。賢二けんじは、明日あすの日にち曜ようには、新あたらしく買かつてもらつた、大おおきなたこをあ上げるのをたの楽しみにしているのです。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「小学文学童話」竹村書房

1937（昭和12）年5月

※表題は底本では、「北風《きたかぜ》にたこは上《あ》がる」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年9月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

北風にたこは上がる

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>